

介護過程の展開における思考プロセスに関する考察

福 原 裕 子

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第51号抜刷）

論 文

介護過程の展開における思考プロセスに関する考察

A study of consideration about thinking process for care course

福原裕子

1. はじめに

介護福祉士養成施設では、平成12年4月教育課程改訂¹により、介護過程の展開方法が追加された。この改訂の中で、介護過程の展開は、「状況把握」、「事前評価」、「介護計画の作成」、「実施」、「実施後の評価」が、その構成要素として位置づけられている。また、渡辺²は、介護過程の展開を、「開始（アセスメント、問題点の抽出、介護計画の立案）」、「実践」、「評価」の大きく3段階に分けている。このように、介護過程の展開については、様々な解釈がある。これらの解釈をもとに、筆者は、介護過程の展開について、まず、図1のように、①情報収集、②問題の明確化、③介護計画の立案、④実施、⑤評価と5段階に分け、更にそれらをスパイラル状に繰り返しながら行うものと位置づけた。

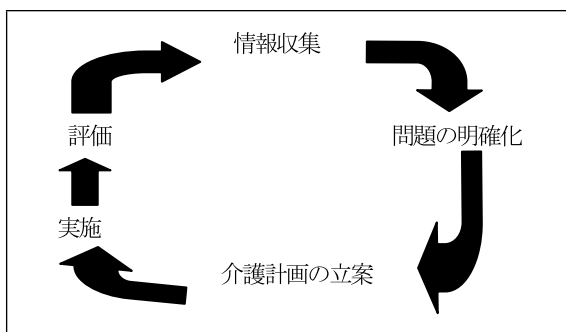


図1 介護過程の展開

この介護過程について、筆者が勤務している養成施設

では、介護実習において介護過程の展開を、次のように入れている。まず、介護実習Ⅰにおいては、コミュニケーション関係が比較的可能な利用者を受け持ち、その特性とニーズを理解すること、介護実習Ⅱでは、介護の方向性を明確にし、自立支援に向けた介護計画の立案までを目標とする。最終的に介護実習Ⅲでは、重度の受け持ち利用者の介護計画立案・実施・評価までを目標としている。

実習において学生の中には展開の途中で思考が混乱し、適切に記述することが困難となるケースが多くみられた。このようなケースの指導をより効果的にするためには、指導者が、学生の思考プロセスを推測しやすいような記録用紙の改良が必要であろうと思われる。特に、介護過程の展開に関する記録様式が学生の思考プロセスに与える影響は、かなり大きいという可能性が考えられる。例えば、藤井³らは実習における介護計画記録等の様式と記載方法について、また、堤ら⁴はケース記録用紙の開発を行い記録様式の妥当性について検討してきた。このように、記録の記載方法や記録様式の開発などの検討が行われてきているが、介護過程の展開に関する記録の、様式による学生の反応の比較検討についてはこれまであまり検討されていない。そこで、筆者はこれまでに、ある年度では、観察項目ごとの「問題点とその根拠」から「問題解決策」を導く展開であった記録用紙を、次の年度では、「問題解決策」の前に「特に取り上げ、考えたい問題点」の項目を設定するなどの改訂を加えたものを使用しており、本稿はそれらの比較を行うことを目的とする。

また、様式改訂の前提として、図1から図2へ構造を変化させたことにより、改善があったことについて考察する。

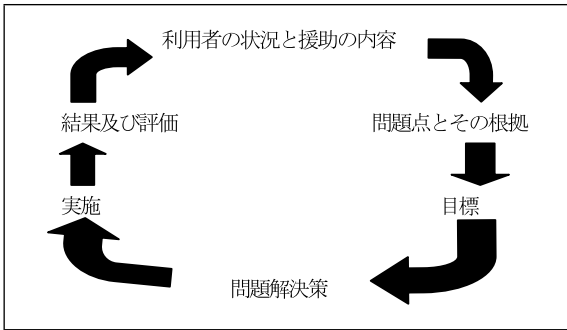


図2 介護過程の展開その2

2. 対象及び方法

1) 対象

保育士養成課程修了者を受け入れている1年課程の養成施設、平成14年度から平成16年度卒業生の中から無作為に抽出した各年度7名ずつのアセスメント表及びケースカンファレンス表を用いた。

2) 方法

①平成14年度から3年間の介護実習における介護過程の展開に使用する記録様式の改訂の経過と、それに伴う学生の記述内容の変化から、思考プロセスの変容について考察する。なお、記録様式の改訂は表1に示すように、平成14年度においては介護実習Ⅰ及びⅡは新規作成し、介護実習Ⅲでは「目標」、「特に取り上げ考えたい問題点」の項目を追加した。平成15年度は、介護実習Ⅰに「目標」、「実施」の項目を追加し、介護実習Ⅱではアセスメント表に観察項目として心理面の視点を追加した。更に、平成16年度には「問題点」という用語を「ニーズ」へ変更、「問題解決」という用語を「援助計画」へ変更した。

②学生に対して記録様式についてのアンケート調査⁵を行った結果を分析する。

3. 結果

今回の分析において、質的な検討が中心であるため、統計的検定を用いた分析は行わない。以下の実習・カンファレンス等に関する学生の行動や、記録内容の解釈記述は、筆者の他2名の評定者（指導教員）の合議によって妥当だと判定されたものである。

表1 介護過程の展開記録様式

時期	段階	様式	変更内容
H14年度	I	ケースカンファレンス記録（表3）	新規作成
H14年度	II	アセスメント表（表4）、ケースカンファレンス記録（表5）	新規作成
H14年度	III	アセスメント表（表4）、ケースカンファレンス記録（表6）	目標、特に取り上げ考えたい問題点を追加
H15年度	I	ケースカンファレンス記録（表7）表3の右半分のみ改訂	特に取り上げ考えたい問題点と問題点の根拠を併記、目標、実施を追加
H15年度	II	アセスメント表（表4）	心理面を追加（※）
H16年度	I・II・III	ケースカンファレンス記録（表6の1部改訂）	問題点をニーズ（※）に変更、問題解決策を援助計画（※）へ変更

※部分のみ変更

平成14年度から平成16年度までの3年間では、表1の介護過程の展開記録様式をそれぞれ使用した。

1) 平成14年度

介護実習Ⅰで使用したケースカンファレンス記録(表3)には、「目標」の項目が無く、学生は問題点への対策に意識が向く傾向が見られた。以下、事例は表2にまとめる。事例1に見られるように、「目標」の項目がないために、単に問題点を解決するという安易な展開となり、目指すケアの方向性に欠けた問題解決策となるケースが多かった。また、「結果」の項目が無いために、学生が独自に加えて記述するケース、カンファレンスの際に口頭で結果を発表するケースが大半を占めた。

介護実習Ⅱでは、アセスメント表(表4)の中で「問題点とその根拠」が十分に記述された学生はごくわずかであった。事例2の問題点「ベッド上での時間が多い」について、根拠を十分把握することのないまま、問題解決策「他の利用者とレクリエーションや体操をしてコミュニケーションをはかる」を策定したケースや、事例3の問題点「ポータブルトイレの中に牛乳パックを捨てる」についても同様に問題点の根拠の把握が十分でないために、問題解決策「捨てるように声かけを行い確認をする」という表面的な事に留まった。3名の評定者はこの点が表面的であることに対応して、実習中に行ったカンファレンスでの学生の発言が、事例2では、「ベッド上での時間が多い理由について本人には聞いていない。」また、「レクリエーションや体操について、本人は行いたいという希望があるのかについては確認していない。」、事例3でも同様に、「なぜポータブルトイレに捨てるのか、について本人に聞いていない。」とあり、これらのことから十分に根拠を把握していない状況だったと判断している。また、目標の項目が無いために、「結果及び評価」項目において、結果のみの記述が多く見られた。評価について記述のあった学生の中でもその対象や程度が不明瞭であった。

介護実習Ⅲでは、アセスメント表(表4)からケー

スカンファレンス記録(表6)への展開にあたり、「特に取り上げ、考えたい問題点」を追加したことにより、問題点の根拠を再確認するという思考の整理が加わった。また、「目標」の項目を追加したことで、事例4では、問題解決策が「手紙の代筆をする。便せんを選んでもらう。手にペンを固定して名前や挨拶の言葉が書けるように援助する…」のように具体化し、更に評価を行うことにも繋がった。しかし、事例5のように目標の設定が大きすぎる学生が大半を占めた。

2) 平成15・16年度

介護実習Ⅰでは、特に取り上げ考えたい問題点と、問題点の根拠を併記した(表7)。ここで根拠を整理することにより、改善された望ましい状況が目標としてあげられることをねらい配置した。また、介護実習Ⅰでは、利用者のニーズを理解することを目的としていたが、平成14年度では問題解決策の実施まで展開していた事実を受けて、実施の項目を追加した。ここでは目標設定が展開に加わるため、事例6、事例7に見られるようにいくつかの事例は目標に向けた問題解決策の策定に繋がった。

介護実習Ⅱ・Ⅲでは、身体面にのみ着目しやすい学生の思考を心理面的側面にも向けさせるためにアセスメント表(表4)に心理面の項目(※)を追加した。この時期から、介護実習Ⅱ・Ⅲは同じ記録様式を使用した。ただし、平成15年度から16年度にかけては、「問題点」という言葉に対して、「失禁がある」あるいは「食事の摂取量が少ない」のように、受け持ち利用者のできないところに安易に注目しやすい傾向が見られるために、「問題点」を「ニーズ(※)」に、「問題解決策」を「援助計画(※)」に置き換えたことの2点を変更した。

目標が大きくなる傾向は平成15年度以降も引き続きみられた。しかし、一方では、事例8のように問題点の根拠を「糖尿病があり、足もとが冷えて気になり困っている」など具体的に挙げ、更にそれに対して、より具体的な目標を立て、問題解決策が具体的に策定され、結果及び評価にも展開を繋げる学生も出てきた。

表2 学生による事例

事例1	問題点	ベッドの上が物置のようになって いるため足元の方で寝ている
	問題解決策	できる範囲で片付けるように声を かける (H14年度 I)
事例2	問題点	ベッド上での時間が多い
	問題解決策	他の利用者としてレクリエーションや 体操をしてコミュニケーションを はかる (H14年度 II)
事例3	問題点とその 根拠	ポータブルトイレの中に牛乳パッ クやバナナの皮を捨てたりする
	問題解決策	牛乳パックやゴミなどをポータブ ルトイレに捨てないように声かけ を行い確認をする (H14年度 II)
事例4	目標	得意なものを生かした手紙が作れ るようになる
	特に取り上 げ、考えた い問題点	手先を使った作業や文字を書くこ とが出来ないので自分で手紙の返 事を書くことができない
	問題解決策	手紙の代筆をする・便せんを選ん でもらう・手にペンを固定して名 前や挨拶の言葉が書けるように援 助する・さをり織りをしている場 面を撮影して手紙に同封する
	結果及び 評価	自分の名前を書かれ、どうしても まっすぐにならなかったが本人は 満足していた様子である。ポスト に入れるとき「行こう、行こう」 とたびたび言われた (H14年度 III)
事例5	目標	リハビリの意欲などがもてる
	特に取り上 げ、考えた い問題点	気分によりリハビリに対する意欲 が見られない時がある
	問題解決策	リハビリなどの様子を見ながらそ の都度声かけなどをして対応して いく (H14年度 III)
事例6	目標	自分専用の電動車椅子が導入され る事で、生活していく上での楽し みが出る
	問題解決策	使用法をリハビリで学び、練習し ていく・心理面の不安を取り除く ため精神的に支える (H15年度 I)

事例7	目標	車椅子からの移乗の際の転倒防止
	問題解決策	車椅子に移乗の時に見守る、転倒 の危険になるものをとる、ブレー キをかけているかを確認する (H15年度 I)
事例8	目標	少しでも足先の冷えがやわらぎ、 気持ちも落ち着き生活しやすくな る
	特に取り上 げ、考えた い問題点	糖尿病があり、足もとが冷えて気 になり、困っている
	問題解決策	入浴日以外の日に足浴を行い足先 を保温する・足先をマッサージし 血行が少しでもよくなるようにす る・リハビリで足を温め、運動を する
	結果及び 評価	足浴はタイミングが悪く実行出来 なかった。足先のマッサージは入 浴中に行くと、その後温かいと言 われていた。リハビリにおいて電 気ホットパックで温めると、気持 ちいいと言われた (H15年度 II)

3) アンケート結果

平成16年度学生20名を対象に、平成17年2月、介護過程の展開に使用した記録様式に関するアンケート調査を実施した(回答100%)。記録に関して項目ごとに、記述のしやすさの面から、非常に良い・良い・普通・悪い・非常に悪い、の5段階で評価し、その理由を記述してもらった。その結果、図3のように、「観察項目」に関しては、良いが55%、非常に良いが5%と、項目の設定に関しては高い評価となった。しかし、「ニーズとその根拠」に関しては普通が75%と高く、良いが15%、非常に良いが5%と他の項目に比べて特に低い評価となった。次いで、評価が低い項目としては「特に取り上げ考えたいニーズ」が、普通が65%、良いが30%、非常に良いが5%が挙げられる。

その理由としては、観察項目については「項目が細かく分けられていてまとめやすかった」「同じような項目があるので書きにくい」、ニーズと根拠については「表現の方法が難しい」「ニーズと根拠を分けて書いてみると書きやすかった」などの記述がみられた。

表3 ケースカンファレンス記録（平成14年度 介護実習Ⅰ）

（利用者氏名		年齢	入所期日
観察項目	現在のADLと援助内容	問題点	（特に取り上げ、考えたい問題点） （問題点の根拠） （問題解決策）
食事			
排泄			
清潔			
衣服			
睡眠			
運動			
コミュニケーション			
環境			
健康			
その他			

表4 アセスメント表（平成14年度 介護実習Ⅱ・Ⅲ）

	観察項目	利用者の状況と援助の内容	問題点（※ニーズ）とその根拠
日常生活行動	コミュニケーション		
	食事		
	排泄		
	更衣		
	清潔		
身辺の生活管理	食物管理		
	衣服管理		
	買い物・金銭管理		
	居室・持ち物管理		
社会的行動	役割と居室		
	人間関係		
	余暇の管理		
	外出		
	家族関係		
※心理面			

表5 ケースカンファレンス記録（平成14年度 介護実習Ⅱ）

問題解決策
結果及び評価

表6 ケースカンファレンス記録（平成14年度 介護実習Ⅲ）

目標		結果及び評価
特に取り上げ、考えたい問題点（※ニーズ）	問題解決策（※援助計画）	

表7 ケースカンファレンス記録（平成15年度 介護実習Ⅰ）

特に取り上げ、考えたい問題点	問題点の根拠
目標	
問題解決策及び実施	

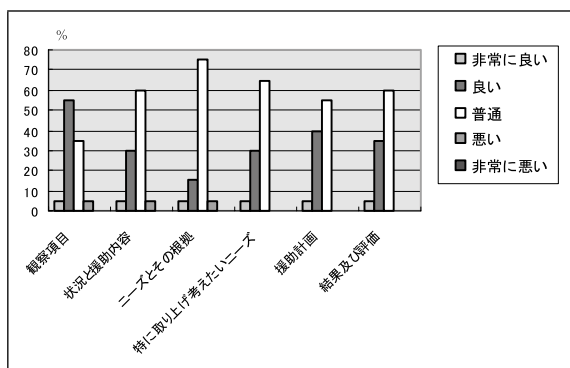


図3 介護過程の展開記録様式に関するアンケート

4. 考察

アンケート結果より、一連の介護過程の展開の流れ(図1)の中で、学生が最も苦手としているのは問題の明確化の部分であると考えられる。また、実習後の自己評価から見ても「問題点を適切に挙げられた」の評価項目は他の項目に比較して、概ね低い。3名の評定者による実習後の検討会においても、事例2及び3の結果で述べたように、問題点の明確化の過程において、根拠を十分に把握していないために適切な問題解決策への展開が困難になる学生が多い、という点で意見が一致している。

受け持ち利用者に関して収集した情報を、整理・分析する中から問題の明確化への過程で学生は思考の壁に直面しやすい状況にあると思われる。巡回指導の際、大半の学生は問題点が挙げられないと悩み、訴える。学生の訴えを聞くと、頭の中では明らかに問題点に繋がっていくであろうと思われる情報が存在している場合が多い。「学生は表面に見えることは捉えられるが見えていることの背景にあるものを捉えようとする意思はうすい」⁶ ため、巡回教員が学生を持つ情報が混乱している部分や、欠けている部分を整理して導くことが必要となる。そのような過程を通して学生は、思考の整理が出来、自ら問題点を口に始めることが多い。その瞬間、思考プロセスが繋がったことで納得し、その達成感から改めて介護過程のおもしろさを実感するものもある。

学生の思考を効果的に整理するために、図1の介護過程の展開の構造を、図2に示すよう改めて組み立て、それを当てはめて作成したものが、表3・表5である。まず、「情報収集」は、「利用者の状況と援助の内容」に置き換えることで、概ね具体的に記述することができたと思われる。また、「問題点の明確化」を「問題点とその根拠」に分類して整理することで、問題点=できない事・困っていることに注目していた記述が、なぜできないのか・なぜ困っているのか、というように、根拠をもって挙げることに繋がっていくのではないかと考える。この過程で問題点を、根拠を持って抽出することができれば、次の展開となる目標が具体的に浮かび上がるのではないかと考える。

そして、図1の「介護計画の立案」を「目標」と「問題解決策」に分割したことで、具体的に挙げた目標を達成するために、現実性をもった問題解決策を策定するという思考過程を促すと考える。事例4では、問題点の根拠を具体的に挙げられたことで、図2の一連の展開をスムーズに実施できたと思われる。この事例のように、記録様式に沿って思考プロセスを踏むことができ、整理できれば、多くの学生が苦手としている介護過程の理解促進に繋がると考える。

5. まとめ

介護過程の展開は、「専門職としての介護実践を導く思考過程であり、利用者主体の生活を支援する生活課題解決のための道筋であり、方法としての介護技術である」⁷ と言われているように、単なるアセスメント表やケースカンファレンス記録等の様式を埋めるという作業でなく、学生自身が考えている道筋を記録に残し、実践していくことである。

本研究では、介護過程の展開に使用した記録様式による学生の反応を比較検討した。平成14年度第Ⅲ段階より、「特に取り上げ、考えたい問題点」の項目を追加したことにより、学生は問題点の根拠について思考を整理する過程を得ることとなった。しかし、問題点の根拠について、的確に把握することが困難な学生は少なくない。学生の理解を深めるためには、図2に

において、展開過程1つ1つに思考の整理をしながらすすめていくことが、より効果的であることがわかった。そのため、記録様式は思考の展開に沿って配置し、項目を整理することが大切である。更に、問題点とその根拠を明確に捉えることが、全体の展開において重要な点となることがわかった。

6. 今後の課題

学内における介護過程に関わる介護概論、介護技術、介護実習指導等の授業において、事例を通して、様式の記述方法のみでなくそこに至った思考プロセスを、学生が自ら意識できるような指導の必要性を感じている。

註

- 1 「社会福祉介護福祉士学校職業能力開発校等養成施設指定規則の一部を改正する省令（平成11年10月22日厚生省令第89号）」
- 2 介護福祉学研究会『介護福祉学』, 中央法規, 2002年, p.98 - 100
- 3 藤井敬美・井関智美・三上ゆみ・藤村恵子・山岡喜美子「実習における介護計画記録と毎日の計画実践記録の様式と記載方法の試案」, 『新見公立短期大学紀要』第21巻, 2000年, p.119 - 128
- 4 堤雅恵・久保田トミ子・横山正博・光岡攝子「介護実習におけるケース記録用紙の開発」, 『山口県立大学看護学部紀要』第3号, 1999年, p.61 - 68
- 5 アンケートの内容は以下の通りである。「介護実習において使用したケースカンファレンス記録について、記述のしやすさからみて5段階で評価し、その理由を記述してください」, 図3参照
- 6 廣重昌子・岡本美也子「『介護過程』教授法の現状と考察」, 『甲子園短期大学紀要』No.21, 2002年, p.18
- 7 日本介護福祉士養成施設協会『介護福祉実習指導マニュアル（平成13年3月改訂）』, 2001年, p.55
(2005年12月1日 受理)